

はじめに

立命館大学人間科学研究所で2000年度から2004年度の5年間にわたって取り組まれてきた私立大学学術研究高度化推進事業学術フロンティア推進事業「対人援助のための『人間環境デザイン』に関する総合研究」の一環としてプロジェクト「関わりに難しさのある子どもへの援助研究」（研究代表：荒木穂積）が中心となって、2005年1月23日にシンポジウム「高機能自閉症児およびアスペルガー症候群児の教育的対応と発達の可能性」（主催：人間科学研究所）を実施したが、本書はその報告書である。

シンポジウムは以下のようなスケジュールと内容ですすめられた。

午前の部では、「高機能自閉症およびアスペルガー症候群の今日的理解」と題して、十一元三教授（京都大学医学部）と青山芳文さん（京都府教育委員会指導部障害児教育課）からそれぞれ基調報告がなされた。

基調講演1では、十一元三さん（京都大学医学部）から広汎性発達障害（PDD）に関する概念や歴史的な変遷を踏まえた上で、神経学的基盤について最新の研究成果に基づいた報告がなされた。その中で、現在最も神経学的に脚光を浴びている脳部位である扁頭体を中心とした扁頭体一辺縁系障害説が紹介された。

基調講演2では、青山芳文（京都府教育庁指導部障害児教育課）から教育現場での経験・実践・保護者の手記などを紹介しつつ、特別支援教育や個別指導計画（IEP）のあり方について報告がなされた。特別の場で、特別な先生が、特別の指導をおこなう特殊教育ではなく、子どもに関わるすべての人がそれぞれの立場で責任を果たしつつ協力・連携して支援することの重要性を示された。

午後の部では、「シンポジウム－教育的対応と発達の可能性－」と題して、加藤寿宏さん、内山登紀夫さん、荒木穂積、望月昭さん（同）からそれぞれ報告がなされた。

加藤寿宏さん（京都大学医学部）は、作業療法士の立場から感覚統合療法アプローチについて幼稚園での実践が報告された。高機能自閉症・アスペルガー症候群の子どもたちがもっている感覚の問題は、これからの研究の発展が期待されている分野のひとつであり、感覚統合療法アプローチの成果が科学的に裏打ち（実証）されることを今日的課題として提示された。

内山登紀夫さん（大妻女子大学人間関係学部）は、日本における TEACCH プログラムの課題を提示された。本来、TEACCH プログラムは生涯に渡る地域支援システムとして位置づいていることを踏まえた上で、TEACCH プログラムを誤って手段（メソッド）としてのみ導入する傾向がある一部の日本の現状を指摘された。また、TEACCH プログラムが現場におけるニーズに対応する形で広がってきたことから、支援を必要とする人の立場を省みて支援を創意工夫していくことの重要性を示された。

荒木穂積（立命館大学大学院応用人間科学研究科）は、本学心理・教育相談センターにおけるプレイセラピーの実践をふまえて、模倣や遊びのもつ可能性について報告した。特に、いわゆる「三つ組み障害」の中でも想像力の障害に焦点をあて、ふり遊びの発達的变化には、子どもにとって興味・関心のある遊び（活動）を通じて、模倣・三者関係・道具的活動といったことが療育活動で保障されることが重要であることを示された。

望月昭さん（立命館大学大学院応用人間科学研究科）は、応用行動分析（ABA）の立場から研究および実践への応用の可能性について報告された。その中で、個体と環境との相互作用の視点から、対象者の「今」の姿を肯定的にとらえた上で支援をおこなうことを特別支援教育の具体化と絡めて報告された。加えて、現状への適応プログラムではなく、選択肢の拡大に向けたプロアクティブ（前進的）なプログラム作成の必要性を提起された。

その後の指定討論では上記4名の報告者の問題提起を受けて、青山芳文さん（京都府教育庁指導部障害児教育課）、江川正一さん（京都市立呉竹総合養護学校、前京都市教育委員会）、両角正子さん（立命館大学大学院応用人間科学研究科）からそれぞれの立場からの意見が示された。江川さんからは教師のモチやすい万能感を実践的に克服することの重要性が、両角さんからは自然環境や日常生活のテンポやリズムに配慮した保育・教育プログラムが重要なことが指摘された。最後に本シンポジウムのコーディネーターでもある荒木穂積から、総括として子どもを支援するという共通した目的に加えて安心・安全な環境の整備の必要性が共通認識として理解されたことが本シンポジウムの意義として示された。

本報告書が、高機能自閉症児およびアスペルガー症候群児の教育の充実と発達の可能性を切り拓く一助になることを期待している。

2006年2月15日

荒木 穂積